

『恋罪 小冊子付き限定版』

著:和泉 桂

ill:高永ひなこ

「お疲れ様で一す」

場違いなほど明るい声に顔を上げると、作家の天(あま)野(の)陽(よう)が笑みを浮かべて編集部の入り口に立っていた。

「天野先生、お久しぶりです」

「桜井さん！」

あからさまに天野は声を弾ませ、透也を見つめてくる。

天野はかつて透也が発掘し、担当をしていた若手作家だが、キャリアと出した冊数でいえば既に中堅にあたる。

昇進した透也が忙しくなったため、手のかからない作家を他の編集者に任せることになり、天野のことも手放したのだ。

「このあいだの新作、拝読しました。とても面白かったです」

「ありがとうございます。桜井さんは最近お忙しいんですか？ 俺、穂高先生の新作、心待ちにしているんですけど」

天野はまるで悪気のない口ぶりだった。

穂高とは対談をしたりする中でメールアドレスも交換したと思うが、継続的な交友はないようだ。

そもそも、穂高とつき合っている友達なんて数えるほどしかいない。

穂高の世界は完成されていて、他者を必要としていないのだ。

「穂高先生は今、精力的に他社の新作とうちの仕事の両方に取り組んでらっしゃいます」

「掛け持ちですか。穂高先生にしては、珍しいですね」

どう答えればいいのかと曖昧に頷く透也を見ていた天野が、不意に、ぽんと手を叩いた。

「桜井さん、これから時間ありますか？」

「え？」

「お茶でも飲みませんか？」

時間的にもまだ酒という時間ではないので、天野の提案は妥当なものかもしれないが、透也は既に天野とは仕事の上での関係がなくなっている。

前担当者が必要以上に関わりを持たば、今の担当者だっていい気持ちはしないだろう。

「時間はありますがでも、先生は打ち合わせでは……」

「著者校正を出しに來ただけなんです。ちょうど夜には別の用事があるて」

「だったらなおさら申し訳ないです」

「言葉は悪いんですが、それまでつき合ってもらえませんか」

申し訳ないと口では言いつつも、天野とお茶を飲むのは気分転換になりそうだ。

どうして穂高とのあいだに距離ができてしまったのか、考える糸口になるかもしれな

い。

だめだな、と透也は心中で自(じ)嘲(ちょう)する。

年下の天野は自分と穂高の関係を知っているせいか、どうしても彼に頼ってしまう。

そうすることを彼が喜んでくれているせいか、ずるずると甘えてしまう。

「行きましょうか」

「ええ」

すっかり先導されてしまったが、拒む理由は特にない。

いつも打ち合わせをする喫茶店で注文を済ませるなり、天野は「で、上手くいってないんですか？」と直球を放ってきた。

「……いえ、ストレートですね」

毒気を抜かれた透也が苦笑すると、天野は「先手必勝です」と澄まし顔で答えた。

「それに、間(ま)怠(だる)っこしいとかえって気を遣わせちゃうかなって思ったんで」

天野が小さく肩を竦めて、ウェイトレスからコーヒーを受け取った。

「さっきも言ったとおり、先生はお忙しいんです。今度、舞台を手がけるので」

「舞台？ どの作品を？」

「シナリオは書き下ろしです」

「それは楽しみだな。主演は？」

天野は素直に声を弾ませた。

「オーディションでこれから選ぶんです。周囲は実力派で固めるので、なるべく遜(そん)色(しょく)ない人選をとっています」

「そうなんだ。俺、絶対見にいきますね！」

目を輝かせる天野の姿に、透也は穂高のシナリオに対する違和感があるのだという言葉がぐっと呑み込んだ。

これが普通の反応なのだ。

なのに、透也一人が期待しすぎて落胆しているなんて、穂高に対して失礼すぎやしないか。

「シナリオ、どんな内容なんですか？」

「現代ものです」

「へえ。主人公は男？ 女？」

「男性ですよ。まだ大学生になったばかりの少年とも青年とも言いがたい年齢で、優しく穏やかな人物です」

シナリオを思い出しながら、透也はついそう説明していた。

プロットのとくと違ってばしっと登場人物のひとりとなりを書いているわけではないので、それは透也がシナリオから読み取った情報だ。

それだけのことがあのト書きと台詞の量でわかるというのだから、やはり、穂高のシナリオは優れているとって差し支えないのだろう。

「ちょっとそそっかしくてすぐに人にぶつかったり、転んだりする。でも、嫌みがなくて不思議と誰からも好かれてしまう——そんな主人公です」

「珍しいですね」

「え？」

天野が話を遮るかたちになったので、透也は訝しげな顔になって彼に視線を向ける。

「いや、穂高先生の作品の主人公って、偏屈だったり素直だったりっていうタイプはい

るけど、おっちょこちよっていうかそそっかしい系は初めてじゃないですか？ 親しみやすくいいと思うけど、だいぶ意外だな」

彼の言葉には、独白めいた調子も混じっている。

「……かもしれません」

「上手く書けてるんですか？」

「当然です」

いつもと違うタイプの作品であっても、穂高に上手く書けないなんていうことは、絶対にあり得ない。

「それなら……もしかしたらモデルとかいるんじゃないですか？」

「モデル？」

「勝手な予想ですけどね」

言われた途端、真っ先に思い出したのは、能海だった。

似ている。

ぞわっと総毛立つような——不快感。

あの何とも言えない愛嬌のある態度とか、可愛らしくせに嫌みのない言動とか、ほんの短時間顔を合わせただけの透也でももっと彼と話をしてみたいと思わせる何かを感じた。

だから、シナリオを読んだときに何とも言えない気分になったのだろうか。

自分は話の内容を穂高の作品における深みがないと誤魔化しただけで、本当は、シナリオから能海の実在を感じ取っていただけなのかもしれない。

だけど、それがどうだというのだろう。

穂高と自分のあいだにあるものを、揺るがしたりするわけがない。

「確かに、モデルはいるのかもしれませんがね」

透也がへこみつつもなるべく穏やかに答えると、天野は驚いたように言葉を失う。

「な……何ですか？」

「そこで妬(や)いたりしないんですか？ ほら、それだけ相手を観察しているってことだし」

「妬(や)いてる、と思います。でも……タイプが違いすぎて妬(や)く必要があるのかどうか」

「惚(のろ)気(け)ですよ、それ」

声のトーンを上げて面白い口調になった天野に、透也は「からかわないでください」と苦笑してみせる。

本文 p139～146 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>